2019.11.19

期待 73-喃語と ASD

小嶋祥三

最近、慶應義塾大学の皆川泰代さんのプロジェクトに、わずかだが、関わるようになった。自閉スペクトラム症 ASD の音声、言語発達である。この領域でわたしがやったことはチンパンジーの音声発達の研究だ。ヒトの音声発達と比較するために、それなりに勉強した。その成果は、*A Search for the Origins of Human Speech: Auditory and Vocal Functions of the Chimpanzee, Kyoto Univ. Press*、*2003* 等に述べられている。今回は脳から離れて、ロクに文献も読まず、喃語について brainstorming 的に考えてみたい。

Oller らの研究が示すように、ヒトの乳幼児の発声は段階を踏んで発達し、7-10 ヵ月齢で喃語を発するようになる。喃語は幼児が発する不快でない、比較的平静な音声で、音声言語の基礎となる。すなわち、喃語が発せられないと、訓練なしには、音声言語は成立しない。生まれつき耳の聞こえない子供は言葉を話すことが難しいが、喃語の発声がなかったり、遅れたりする。これはまた、喃語の発達には聴覚のフィードバックが必要なことを示唆する。喃語の発声に必要なもう一つの条件は運動機能の発達である。ここではまず、喃語の発達と聴覚について考える。

自閉症 ASD でも言葉を話すことが難しいことがある。ここでいくつかの問題が出てくる。ASD の子供は定型発達 TD の子供と同じような段階を踏んで喃語に至るのだろうか。喃語の発声は TD の子供と同じだろうか。喃語には聴覚のフィードバックが必要だが、ASD の子供の聴覚機能は TD と同じだろうか。ASD では社会性に問題が出るが、それは聴覚、音声の側面にも現れるのか。例えば、ASD では社会的な聴覚刺激への興味が少ないのだろうか。また、養育者とのアイ・コンタクトが少ないのなら、それは養育者との音声交換でも見られるのだろか。以下に、これらの疑問について考えてみる。

まず、初語に至る音声発達だが、TD では 1．発声期（0-1 mo，月齢）、2．GOO 期（2-3 mo）、3．拡張期（4-6 mo）、4．標準的喃語期（7-10 mo）、5．非重複性喃語期（11-12 mo）と、段階を踏んで初語の発話となる。聴覚障がいの乳幼児の拡張期の音声は TD と変わりないようだ。しかし喃語はでてこない。では、ASD の乳幼児は同じような音声の発達を示すのだろうか。特に、喃語に関係する 4、5 期は詳細な研究が必要だろう。もし、喃語が養育者とのインタラクションを通して獲得する面があるのならば、ASD の養育者への注意の減少が喃語の獲得の障害になっているのだろうか。この場合は、初めは ASD も喃語を発する可能性がある。或いは、ASD にみられる運動機能の低下は喃語の生成を減少させるのだろうか。もしそうならば、それは喃語の前の拡張期にも TD との違いがみられるかもしれない。

ASD の聴覚機能について考えてみる。ASD の聴覚の基本特性、聴感度や各種弁別閾、が TD と大きくは違わないと思うが、抑えておくべき点だ。特に、音の短時間の内に起こる変化は喃語と関係するので、周波数弁別能とともに、時間弁別機能は重要だ。また、聴覚障が

い児では自分や他者の発した音声などを聴取できないが、喃語の形成にとって、そのいずれか、あるいは両方が重要なのだろうか。ASD では自分の発した音声を聴取できる。しかし、ASD は養育者の声に注意が向かないかもしれない。そうであるならば、自他両方の音声を聴取できることが喃語には重要なのかもしれない。また、ASD は自分の発する音声に注意が向かない、あるいは、興味を持たないかもしれない。拡張期は別名声遊びの時期とも呼ばれる。自分の声に興味がないならば、声遊びは少ないかもしれない。

このような疑問に関連した論文を読み、項目を設けて紹介していきたい。